

源氏物語爪印--柏木巻

著者	村井 利彦
雑誌名	山手日文論攷
号	25
ページ	33-46
発行年	2005-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000932/

源氏物語爪印

— 柏木卷 —

村 井 利 彦

【1】この巻は、新年より始まる。病人・柏木の両親への愛。源氏物語後半のテーマの一つ「恩愛」が、この巻の冒頭よりじわりと語り出される。

【2】「いはけなかりしほどより、思ふ心異にて、何ごとをも、人に今一際まさらむと、公私のことに触れて、なめならず思ひ上」る性格。柏木は、誇り高い男。光源氏と競った父の血脈である。そして彼もまた、父のように、思いがかなわぬ人生をおくる。その人生を父は耐えたが、彼は耐えられなかった、ということか。夕顔とその娘を取られた父。女三宮を取った息子。この二つの事件は、均衡し相殺することがなかったのである。

玉鬘十帖を描いた意味は、ここまで濃密な影を落とす。連戦連敗の藤原氏、といった感覚である。

【3】思えば、玉鬘十帖は、致仕の大臣（内大臣）家屈辱の巻々。近江君はその象徴であった。柏木の行為は、致仕の大臣家の決然たる反撃と読むことは許されよう。しかし、結果は無残な敗

北。そして破滅。藤原氏をここまで徹底して悪役にする精神的風土をとくと考えるべきである。

【4】「一つ二つの節ごと」の具体的内容だけでも、玉鬘のこゝと、女三宮への求婚、あるいは女二宮との結婚などを想定すればよい。その後、世を厭い出家願望にさいなまれたが、親の悲しみを思つてぐずぐずしてきた。このあたりが、若菜巻における柏木の空白を埋める部分だと了解してよいだろう。

【5】「誰も千年の松ならぬ世」。これが若菜巻の結論であった。光源氏とて、逆さまに行く世は不可能であった。それは事実である。しかし、これからは、事実を越えた光源氏を例外とする処置に作者が転換することも、充分に考えられる。その転換を可能にするのが、柏木および、その子・薫の犠牲である。という見方はいかが。

【6】「一つ思ひに燃えぬるしにはせめ」と柏木は思う。自分分は死ぬ。だれかの胸に、自分の思い出をのこせたら、それで

本望だという思い。激しく燃えた青春のかたみ。小さいものであっても、偲んでくれる人がいればよい。この柏木の思いは、この巻で圧倒的に叶えられる。この巻は、「あはれ衛門の督」という世の人ひとしなみの感嘆で閉じられるからである。柏木が青春のヒーローとなる巻、これが柏木巻なのである。

【7】「今はのとちめには、皆消えぬべきわざなり」。死をもつて、問題解決を図る柏木。彼の誇りは、この死以外には保たれる手立てがない。彼の肉体は、そういう彼の意思に沿って反応したものだと思われる。死が、光源氏の怒りを消滅させるやいなや。これから問われる問題である。が、彼の発想は甘いのではないか。その昔、藤壺の死が罪を何も解決しなかったように。源氏物語の論理は、現実より厳しい。

【8】柏木のこととは、こうも考えられる。恐るべき罪が露顯した時の有様を徹底して書く。ということは、柏木ののたうちまわる姿こそ、偶然それを免れた光源氏の陰画であるという読みである。「あはれ衛門の督」というキーワードの受け止め方は、源氏物語のなかの人々と、われわれ読者とは、決定的に違うはずである。

【9】女三宮へ贈った柏木の歌「今はとて燃えむ煙もむすばほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ」。思いが残るということは、近い将来、柏木が六条御息所になるということである。若菜で御息所の死霊を描いた意味は、この条にかかるためであったということかもしれない。

【10】「あはれとだにのたまはせよ」と柏木は言う。女三宮の愛

だけが、今の彼には救いとなる。はたして、作者はそれを許すのか。読者には、興味ぶかいところだろう。作者が柏木の死を大死とする処置を講ずるや否や、ということだ。

【11】女三宮は、光源氏の行為の細部に着目し、光源氏を意思を推量している。「はづかしげなる人の御けしきの、をりをりにまほならぬが、いと恐ろしうわびしきなるべし」。

【12】小侍従は柏木の胸の内を誰よりも知っている。「童より、さるたよりに参り通ひつつ、見たてまつり馴れたる人」であつたから。若菜下巻の系図を想起してほしい。彼女は、柏木の乳母子（弁）と従姉妹であり、小さいころから姉妹同然に育った。この二人を核にして、柏木・弁・小侍従・女三宮は、心理的身内感覚が醸成されていたのである。小侍従は、女三宮に返事を無理矢理書かせ、それを持ってゆく。彼女は、「肖のまぎれに」女三宮の秘密の意思を、いま運んでいるのである。その手紙の内容を、作者が読者にすぐに見せないところがにこらしい。

【13】致仕の大臣家は、異様な光景である。深い山中の験者、「けにくく心づきなき山伏」を呼んで祈祷させている。光源氏が去年必死の祈りで紫上を死から奪還したごとく、致仕の大臣は柏木を蘇らせることができるか。彼の実力の問われるところである。比叡山の座主、あるいは僧都を呼んでいないところが気にかかる。柏木の病がそういう「葛城山」ごとき「隈々」の験者を呼ばねばならぬほど、今や末期の症状を呈しているということであろうか。こういう世間にその存在も知られていないが、非常に験のある、異端の修行者、役行者の末裔たちが当時

かなりいたものと推察される。なお、現在、女三宮が出産寸前であるという事情を考慮すると、近在の修験者は皆、六条院へ出払っていて、致仕の大臣としては、こういう辺境地帯の修験者を頼らざるをえなかったという現実的事情もあったのではないかと推察される。しかし、この巻で、なかなか柏木が死なないのは、葛城山の験者などの祈りが効いているせいであろう。

【14】 柏木の病氣の原因、つまり物怪を、陰陽師の多数が「女の霊」と占ったという。誰のことか。六条御息所か。だとすると、葵巻からの連続性がでてくる。致仕の大臣家に彼女が出てくる必然性については、親の代から連続したもので問題はない。

【15】 女の霊が、女三宮だったらこの身も愛しく思われるのに、と思う柏木。瀕死の柏木のこの余裕はなんだ。作者は、物怪けなど全く信じていないのではないか。むしろ、筋を動かすために物怪を利用しているにすぎない。どうやら物怪という現象は、作者にとっては都合のよい将棋の駒にすぎぬようだ。

【16】 柏木は小侍従に言う。「さてもおほけなき心ありて、さるまじきあやまちを引き出でて、人の御名をも立て、身をもかへりみぬたぐひ、昔の世にもなくやはありける」。しかし、彼の行為は彼を死に到らしめた。これは光源氏の「異なる御光」のためであると。この彼の認識は、誤解の上になった幻想にすぎない。もし、彼が夕霧のように、光源氏の欺瞞を示す様々の事実を承知していたら、こういう想念に到達していたかどうか、はなはだ疑問である。おそらく、かれは、「昔の世にもなくや

はありける」という地点で居直り、むしろ逆に、光源氏にとどめを刺していたのではないか。光源氏の威光は、柏木にとって殺傷的影響力を及ぼすが、読者にとっては、虚しいものでなく、柏木が痛ましいのみである。「まどひそめにし魂の、身にかえらずなりにしを、かの院のうちにあくがれありかば、結びとどめたまへよ」。いま、自分の魂が、六条院をうろついているのではないかと柏木は小侍従に言う。なんたる弱気か。「あはれ衛門の督」よ。

【17】 しかし、「昔の世になくやはありける」と柏木が言った時、彼自身は知らないことだが、読者にとっては、柏木の切っ先がほとんど光源氏に届いていることを知らしめられる。昔の例は、なにも歴史社会上に求める必要は何もなく、源氏物語上に歴然としてある。光源氏が藤壺と「おほけなき心」で「さるまじきあやまちを引き出でて」、あまつさえ、その子供が即位してしまったという実例である。そして、罪人・光源氏は罰を受けぬばかりか、罪を正当化しようとさえしている。なんたる不埒。この時、柏木の映像は、光源氏の陰面としてフラッシュバックする。柏木は、その昔、光源氏が陥ったであろう事例の表示なのである。作者の、この巻を書いた意図も、このあたりにあったのではないか。かくして、光源氏の罪は、柏木の背に担われ、源氏物語の世界の外に出てゆく。光源氏は、この柏木の犠牲行為、あるいは柏木を殺す影響力の画面によって、剥がれ落ちた神性を回復してゆく。というのが、これからの作者の目論見なのではないかと考えたい。

【18】魂を「結びとどめたまへよ」という発想、葵巻の、六条御息所のものが歌った歌の地点にまで、われわれの意識を遡行させる発想である。「嘆きわび空に乱るるわが魂をむすびとどめよしたがひのつま」。

【19】「見し夢を心ひとつに思ひ合はせて」と柏木は小侍従に言う。女三宮が今出産しようとしている子供は、自分の子供なのであるということ。「見し夢」とは、初めて逢った時、ふとまどろんで見た猫の夢のことである。↓若菜下巻。猫の夢が懷妊のしるしという説は、この部分を出典としているのではない。か。

【20】女三宮の手紙は、柏木への愛の表白。「後るべうやは」。激しい愛の表白ではないか。柏木の感激「あはれにかたじけなし」「この煙ばかりこそは、この世の思ひ出ならめ」は当然の反応であろう。作者は、柏木に対するはなむけ路線を選択している。

【21】柏木の手紙。「行方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち離れじ」。自分が死んだら、誰はばかることはない。「かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ」。死によって、彼らは自由になり、純愛は成就するという発想である。女三宮の「後るべうやは」より得た自信の表現である。この時、光源氏コキューの悲哀は本物となる。死によって光源氏を打ち砕く。柏木の死は、女三宮の共感を得れば、断じて大死にはない。

【22】「例は無期にむかへずあて、すずる言をさへ言はせまはしうしたまふ」でもって、日頃の柏木と小侍従の関係を想像できる。今の柏木には時間がないのである。死が間近に迫っている

印象が強い。本人も言っている。「何か。なほとまりはべるまじきなり」。

【23】女三宮の出産。彼女は小侍従が柏木の文を持って帰ったその「暮れつかた」より陣痛が起こり、翌日の朝「日さし上がるほどに」運命の子・薫を出産している。こういう設定は、薫の出生が、二人の純愛の所産であることを印象づける。

【24】光源氏は、子が男であったことを苦々しく思う。「かく忍びたることの、あやにくにいちじるき顔つきにてさし出でたまへらむこそ苦しかるべけれ」。男君ということは、冷泉帝の人生の再現であると考えられる。そういえば、致仕の大臣家の顔は特徴があるから、言い訳はあまり通用しそうにないではないか。しまりのない目もと、狭い額。理想形である光源氏とはひどく違って、はなはだ個性的である。間違えようがない。世の常ならざる人と、常なる人の差である。絵巻物において、描き分けられている、馴染みの筆法である。

【25】光源氏の思い。「さてもあやしや。わが世とともに恐ろしと思ひしことの報いなり。この世にて、かく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪も、すこし軽みなむや」。因果応報。これで、自分の罪は軽減されるはずである。光源氏は、こう事件を合理化する。この路線、作者ははたして選択するやいなや。光源氏の神性回復のために、この路線を誰はばかることなく選択するような気がする。

【26】何も知らない世間の祝いは豪勢である。事情を知らなければ、この若君は「かく心ことなる御腹にて、末に出でおはし

たる御おぼえいみじかり」ける若君なのである。産養の儀。五日は秋好中宮。「院の殿上人皆参れり」。冷泉院あげてのお祝いであつた。ここで、冷泉院を強調しておくのは、罪の強調にほかならない。七夜は帝。私的なものではなく「公さまなり」とある。柏木のことで余念ない致仕の大臣は挨拶のみであつたらしいが、親王、上達部など沢山参加したらしい。

【27】「このついでにも死なばや」と思う女三宮が描写されている。彼女は、ここにいたって、自分の意思を持つ女になっている。若菜上巻の紫上に同じである。歴史は繰り返す、今また女三宮が光源氏から自立する。光源氏の孤独は避けられようがない。そして、「人目を飾」るばかりで、若君を抱こうともしない光源氏の態度に、女三宮は出家を決意する。夜泊まることはなく、昼のみしか顔を出さない。光源氏の態度は、周囲の目にも不審であり、女三宮本人の目には歴然たるものがあつて、誤魔化しようがない。

【28】「かかる人は罪も重かなり」と女三宮は言う。お産で死ぬ人は、罪の重い人なのだという発想である。当時、こういう考え方があつたのか。葵上、宇治八宮の北方のことが想起されよう。

【29】尼にしてほしいという女三宮に対して、表面では反対しつつも、内心、その方が都合がよいと考える光源氏。残酷な構図である。女三宮は、そういう光源氏の心を読み切っている。彼女はもう子供ではない。この柏木巻は、柏木の確立だけが目的ではない。女三宮が光源氏から独立する物語でもある。その

意味では、この巻は、若菜上巻の紫上の補完機能も持つといえよう。

【30】寝れた女三宮の「おほどき、うつくしげ」な姿を見て、「いみじきあやまちありとも、心弱く許しつべき御さまかな」と思う光源氏の心理はいやしい。こういう男に許してもらつても、女三宮の幸せはない、と読者は思うだろう。なんだか、その昔、光源氏を愛する臘月夜を愛した朱雀院に、あろうことか光源氏があつてゐる感想をもたないか。

【31】女三宮の病状を案じ、本人が会いたがつてゐるという情報を得た朱雀院の行動は、素早い。「夜に隠れて」彼はやってくる。しかも「うるはしき御法服ならず、墨染の御姿」で。これは、出家者の行為ではない。子どもへの愛に惑つて走る親の行為である。この巻のテーマ「なほまどひさがたきものは、この道の闇」がいよいよ正面切つて語られる。「恩愛」である。

【32】朱雀院の六条院訪問は、藤裏葉巻以来である。あれからおよそ十年近くの月日が経過している。光源氏は、朱雀院の「墨染の御姿、あらまほしうきよなる」姿を、「うらやましく見」た、とある。朱雀院の先立つた出家でもって、女三宮を押しつけられ、同じく出家を目指していた光源氏がこの世に押し戻された事情については、若菜巻の初めに書かれてあつた。いま、その原点に立ち戻った感がある。激動の十年。感慨一入であつたと推察される。とかくこの世はまならぬ。

【33】対面は「御帳の前」。女三宮を「とかう人々つくるひきこえて、床の下におろし」ての対面出ある。運命の行為のあつた

現場、同じ位置での対面。意識的な操作だと思う。

【34】女三宮の前で、「夜居の加持の僧などのこちすれど、まだ験つくばかりの行ひにもあらねば」という朱雀院。善良な人柄がよく出ている。

【35】女三宮の出家願望を聞いた朱雀院が、本人にはたしなめた後、光源氏に出家させてやりたいと言う。光源氏は、「邪氣」を理由に問題にしない。そういう光源氏の意思に従わず、反論し、強引に出家させてしまう朱雀院に注目したい。さらに朱雀院は、女三宮に対する光源氏の冷たい処置を充分承知しつつも、光源氏と訣別せず、「おほかたの後見」として光源氏を利用する道を選ぶ。この場面の朱雀院は、これまでの朱雀院とは違う。情に流されず冷静に状況を読み、政治的行為を選択している。

善意の人の変貌である。これが、彼の修行の成果なのだろうか。朧月夜から秋好中宮、そして女三宮。彼の善意、人の良さもこれまで、ということではないか。朱雀院の自立。朱雀院にまで、こう思われるようになった光源氏の悲劇性には、もっと注意が払われてよいのではなからうか。紫上、女三宮、そして朱雀院の分離。光源氏の孤独はここに極まった感が深い。

【36】突然やってきて、だしぬけに女三宮を出家させてしまう朱雀院の行動が、彼の内面を雄弁に物語っている。彼は、光源氏から娘を奪還したのだ。結婚による幸せの放棄。いま朱雀院は、血の論理をかざさざるをえない。これは、一番寂しい愛の形の提示である。恩愛。

【37】女三宮の出家阻止のために、あわてて説得する光源氏に、

女三宮が頭をふる場面はよい。女三宮が見せた、最初で最後の強い意思である。彼女は、不満をもちつつも折り合ってゆく、後の宇治中君のような、世の常の夫婦になる道を決然として捨てた。この時、光源氏は、まさしく、女三宮に捨てられたのである。彼女は父を選び、父のもとに帰った。女三宮の自立である。ここで初めて「うらめしとおぼすこともありけるにや」と、女三宮の胸のうちを察する光源氏は、いかにも迂闊である。光源氏は自分の事ばかり考えていて、女三宮への思いやりに欠けていたのだ。

【38】この、女三宮の出家という事実を朱雀院側からみれば、彼は、自分の娘を、光源氏から取り戻したということになる。朱雀院は、ちょうど桐壺帝が何も知らずに、光源氏の危機を救った明石巻の時のように、親としての盲目の愛の原理に従い、確信をもって行動し、娘の悲遇を救ったのみである。いわずもがなのことではあるが、朱雀院は、女三宮の犯した罪の実態については、桐壺帝同様、全く知らない。

【39】女三宮の出家は、六条御息所の物怪の仕業であった。としまさながらの処置をとったのは何故か。せっかくの、女三宮の意思の尊厳さが、これによって相当に薄められてしまう。こうすることが、女三宮の、源氏物語における重さを調節し、その程度の人物として位置付けられてしまう結果となるからである。女三宮の下方修正。女三宮は、しよせん脇役なのである。女三宮に比べると、六条御息所の方がむしろ主役なのではないかというのが、このあたりの正直な感想であらう。

【40】しかし、結果として、光源氏の朱雀院に対する言い訳が本当のことになったのは皮肉というべきだろう。しかしながら「もののけの教へにても、それに負けぬとて、あしかるべきことならばこそ憚らめ」という朱雀院の言葉は、この場合でも正さを失わない。これでよかったのである。もののけなど問題ではない。

【41】六条御息所の物怪のために、産後まもなく死ぬという設定は、正妻・葵上の時であった。女三宮が、ほとんど葵上の運命に瀕したということは、女三宮が正妻である証明だという見方も成立する。最近、おなじく六条御息所の霊にとりつかれ死に瀕した紫上とて、同様の発想が可能だろう。光源氏に本当に愛されている人のみが、六条御息所の霊に崇られるのである。六条御息所は、ごく最近の女三宮・柏木事件については、桐壺院や朱雀院同様知らなかった。で、こういう行動に出たのである。

【42】それにしても六条御息所である。どうだろうか。結局のところ、光源氏を一番愛していた人物は、紫上ではない。断じて六条御息所だと、作者が宣言しているのが、この物怪設定ではないか。これは、これから、近々紫上の死を描くにあたっての重要な前提条件となることが予想される。紫上は、光源氏に一番愛されていたが、それに見合うほどに光源氏を愛したわけではない。これは、純愛の破綻、ではないか。紫上の人生とは、一体何だったのか。さても、愛執に留まる女と、愛執から抜け出る女。紫上のこれからの人生は、六条御息所が留まった

愛執の世界からの脱出行として捉える必要を感じる。そのため六条御息所の、ここにおける大書強調と考えるべきではないか。そして、女三宮の行為も、愛執を抜け出すという流れの中で理解すれば、今現在進行中のもので、これから語られるであろう紫上の行為を支持する基盤となっていることが分かうと思う。

【43】六条御息所は「今は帰りなむ」とどっと笑って去っていった。ものすごい迫力である。もうこれで、彼女の一番ではないのではないかと思われる終わり方である。

【44】作者は柏木をなかなか死なさない。彼は、女三宮が男の子を出産したのを知り、自分との愛を確認し、その証だと充分に推測される女三宮の出家、つまり光源氏世界からの脱出という事実も知った。その上で死ぬのである。知るべきことを全部知って死ぬ。これは、柏木へのはなむけとしては、これ以上の処置はなからう。さらに官位昇進。大納言になったの死。完璧ではないか。

【45】柏木は、落葉宮に逢いにゆきたい。が、両親が許さない。死の床に呼ばれてもいない。恩愛の圧倒的勝利。親のエゴというべきか。

【46】落葉宮のことも、朱雀院は誤解している。女三宮とくらべ、落葉宮は幸せである。娘二人を誤解する父親。朱雀院も、源氏物語のなかで、けっして良い位置を与えられていない。

【47】柏木の落葉宮への配慮。死に臨み、彼は優しい男になれた。この気持。おそらくは、彼の女三宮に対する満足感からき

ているものと思われる。女三宮の形代・代行である落葉宮のいとおしさを彼は感じているのではないか。これでもって落葉宮も救われたのではないか。

【48】落葉宮のことを頼んだ「右大井の君」は、柏木の弟である。後の紅梅大納言のことかと思うが、どうか。

【49】柏木を権大納言にしてから死なせる。前途を惜しまれながらの死。桐壺更衣の父、つまり光源氏の外祖父も、紫上の祖父も、このような死であったのかもしれない。ということをもふと想像させる展開である。しかし、あれは按察使大納言。按察使という仕事がついている大納言だから、そう考えないほうがよいかもしれない。

【50】柏木を見舞いに行つて、夕霧は柏木の病氣の原因が、光源氏の不興を買ったことにあることを彼自身の口から聞く。柏木は、秘密を夕霧に託し、するすみとなって死んでゆくのである。彼は往生できるかもしれない。一方、夕霧は、柏木の、この世にのこした想念を背負って生きてゆくことを余儀無くされる。落葉宮のこと、女三宮の秘密、薫のこと。彼の、世話役としての人生は、ここに決定したというべきか。しかし、ここでも、夕霧は、柏木殺しという光源氏の絶対的秘密を把握したわけであり、光源氏は、夕霧の前でほとんど、裸の王様と化していることが分明である。世代交代は、いつでも可能。光源氏に対する生殺与奪の権は夕霧の掌中にあるということである。夕霧時代の到来であろう。

【51】柏木は、光源氏との一件を「ことの違ひ目」と夕霧に語っ

ている。「いかなる譏言などのありけるにか」で分かるように、この「ことの違ひ目」、表面は誤解といった意味であるうが、その奥に大事件を包含した婉曲表現である。若菜上巻において、明石入道が若い日、都を捨てざるを得なくなった原因を、光源氏は「ものの違ひ目」と表現していた。それと、状況、表現が酷似している。作者がわざとやった表現だと考えられる。これを見逃すべきではない。

【52】柏木は言う。「一条にものしたまふ宮、ことに触れてとぶらひきこえたまへ」。落葉宮物語の開始である。女三宮物語の開始と似ていることに注目したい。死にかかった人の頼みは聞かざるをえない。かつての光源氏のように。そして、この遺言は、宇治八宮の遺言から始まる宇治の姉妹の物語への心理的導入となっていることも注意したい。

【53】柏木の最期を惜しむ人々。弘徽殿女御、雲居雁、玉鬘。玉鬘に言及している点が注目される。岩漏中将時代の彼の映像が、一瞬フラッシュバックする。あの頃が、彼の一番よい時季であった。

【54】「やむ葉ならねば」という言葉も面白い。死に際の表現としては不謹慎ではあるが。恋の病は相手に逢う事でしか直せない。付ける葉などないのである。

【55】「泡の消え入るやうに」柏木は死ぬ。はかなくも、無念の死。「だだかく短かりける御身」の生涯。「泡」であるが、これは、仏説にいう無常の表象であり、決して大死にのイメージではない。『法顕伝』によれば、カウノジ城の西六、七里。ガ

ンジス川の北岸で、仏陀は「身は泡沫の如し」と説いたという。

『金剛經』には、「一切の有為の法は、夢・幻・泡・影の如し。露の如く、また電の如し」とあり、『三宝絵』の序に「世ハ皆堅ク全カラザル事、水ノ沫、庭水、外景（かげろふ）ノ如シ」とある。これは『法華經』隨喜功德品を踏まえた文である。

【56】泡のような死をめぐる、『古今集』の友則の恋歌が引用されるが、いささかしっくりこない。ここは、『後撰集』巻第十五雑一の、大江千里歌をふまえていると解釈したらどうか。

「世の中の心になはぬ」など申しければ、「ゆくさきたのもしき身にて、かゝる事あるまじ」と人の申し侍りければ

流れての世をもたのまず水の上の泡に消えぬるうき身と思へば（一一一五番）

「世の中の心になはぬ」が、柏木の人生の総括である。「あはれ衛門督」の発想である。この方がよいのではないか。なお、『千載集』巻十九釈教に藤原公任の歌がある。

維摩經十喻、この身は水の泡のごとしといえる心をよみ侍りける

ここにきえかしこにむすぶ水の泡のうき世にめぐる身にこそありけれ

これも参考になろう。

【57】今は「尼宮」となった女三宮の思い。「若君の御ことを、さぞと思ひたりしも、げにかかるべき契りにてや、思ひのほか心に憂きこともありけむ」。密事の合理化である。光源氏の思

いと比較してみるとよい。光源氏の思いは、自分自身に向かい、女三宮の場合は子供に向かっている。

【58】女三宮の思いを辿ってゆくと、薫の人生は、光源氏とは全く関係のない人生であって、それは藤原氏物語である。源氏物語においては、はなはだ異質の物語の誕生ということであろう。

【59】柏木の父・致仕の大臣は、藤原の父と皇女の母の結婚によって生まれた人であった。薫の誕生は、まさしくこの型を踏襲している。柏木がもうすこし長生きをして、光源氏と折り合えたら、祖父のごとき人になった、とも考えられる。あるいは、これと似た事情で、かつての左大臣は大宮と結婚したのであろうか。まさかと思うが、源氏物語の重層構造からすれば、可能性のない想像ではない。

【60】柏木の死は、光源氏を変化させる。三月、薫の五十日の祝い。彼は女三宮を「今しも、やむごとなく限りなきさまにもてなしきこえたまふ」。しかし、後の祭り。

【61】三月に五十日の祝いということは、薫の誕生は、一月下旬ということになろう。冷泉院の誕生に近接して設定してあることに注意したい。

【62】『本朝皇胤紹運録』に掲載されている年を計算すると、在原業平が生まれた年、彼の母・伊豆内親王はすでに出家している。ということとは、内親王は尼姿で業平を生んだことになる。出家後、一二年の話らしい。これは、ちょっと信じがたい話だが、薫誕生と、この話はどこかで繋がっていないか。女三宮の

「まだありつかぬ」尼姿は、伊豆内親王のイメージなのではないか。内親王は、兄・平城帝の死後、出家している。よほど兄を慕っていたものと考えられる。この『本朝皇胤紹運録』の記事が事実なら、業平は、記憶の最初から、母は墨染めの衣を着ていたわけだ。ちょうど源氏物語の、この薫のように。

【63】朱雀院は、女三宮の髪を相当長めに切ったらしい。朱雀院の無念さ、親の優しさのにじむ記述である。

【64】五十日の日の光源氏と女三宮の会話。「取り返すものにもがなや」という光源氏に対して、女三宮は当然のことながら冷淡。「かかるさまの人は、ものあはれも知らぬものと聞きしを、ましてもとより知らぬことにて、いかがは聞こゆべからむ」は、痛烈な返答である。これに対して「おぼし知るかたもあらむものを」と、柏木との愛を匂わす光源氏はちょっと無神経、余裕に欠ける。これですます女三宮の心が、故人・柏木のほうに逃げてゆくのはいたしかたあるまい。

【65】五十日の祝い。光源氏が初めて薫を抱く。薫の容貌。夕霧などの「児生ひ」に似ていない。「まみのかをりて、笑がちなる」。これは、玉鬘と一緒にではないか。↓野分巻。薫は玉鬘を経由して、致仕の大臣家に繋がっているのである。光源氏が「思ひなしにや、なほいとおぼえたりかし」と柏木を思ったのも当然である。この巻で、作者がちらちらと玉鬘を出している理由は、こんなところにもある。

【66】「静かに思ひて嗟くに堪えたり」。晩年に子をもうけた白楽天を引き合いにだしたのはなぜか。現在の光源氏の年齢が、

その時の白楽天より十歳若いことをいうためか。否、むしろ目的は、引用の詩「自嘲」の末尾におかれた句「汝が爺（ちち）に似ること勿かれ」であろう。「汝が爺にとも、いさめまほしうおぼしけむかし」と草子地にある通りである。この言葉、薫の人生を決定する言葉ではないか。光源氏は、この子に父・柏木とは違う人生を今吹き込んだのである。この言葉は、これより後、薫の行為に決定的な影響を与える呪文となる。参考までに「自嘲」を引いておく。

予与微之老而無子。発於言歎。著在詩篇。今年冬各有一子。戲作二什。一以相賀。一以自嘲

(一)
(略)

(二)

五十八翁方有後
一珠甚小還慙蚌
秋月晚生丹桂実
持盃祝願無他語

静思堪喜亦堪嗟
八子雖多不羨鴉
春風新長紫蘭芽
慎勿頑愚似汝爺

(白楽天詩後集卷十)

なお、次に続く本文に「烏澁」「二つ言はむ」「色にも出だしたまはず」は、この誌を意識した用語で、作者の白楽天理解の深さをおのずから示すものとなっている。

【67】光源氏の年齢。「五十八を十取り捨てたる御齡」、つまり四十八歳。まもなく五十賀が来る。若菜下巻の朱雀院となる日が近い。

【68】若君の「何心なう物語して笑ひたまへるまみ、口つき」が、柏木によく似ている点に再び言及。「子だにあれかしと泣」いている親たちへの同情。光源氏も、柏木のことを「あはれに惜し」と思っている。この巻は、柏木追悼、復権の巻なのである。そうしないと、次なる主人公、若君・薫の人生が始まらない。

【69】それにしても、致仕の大臣だ。いま光源氏の許に忘れ形見がいることも知らず、悲しみにくれている。しかし、今回は、玉鬘の時のように事は運ばないだろう。忘れ形見を知ること無しに、彼はきつと死ぬ。あはれ致仕の大臣、あはれなるかな藤原氏、である。

【70】子供を見捨てて出家した女三宮の神経をさかなでる光源氏。彼の歌「誰が世にか種はまきしと人間はばいか岩根の松はこたへむ」は、若菜下巻、酒を勧めて柏木に迫った時と同じか、それ以上に露骨である。もうよいではないか。愚痴な男よ、と読者はきつと思うはずである。

【71】夕霧の推察。彼は、確度の高い推測によって事件のあらましをほぼ正確に把握している。あとは、光源氏に確認する作業が残っているのみである。そして、この一件に関しては、「いみじうとも、さるまじきことに心を乱りて、かくしも身に代ふべきことにやはありける、人のためにもいとほしう、わが身はいたづらにやなすべき、さるべき昔の契りといひながら、いと軽々しう、あじきなきことなりかし」と批判的である。この夕霧の思念は、源氏物語の構想を考える上で重要である。こ

の時、紫上が女三宮となることはないという点が、確認されるからである。夕霧は紫上の安全装置だということが、分かろうというものだ。また、光源氏に「かかることをなむかすめしと申し出でて、御けしきも見まほしかりけり」とあるから、玉鬘の時と同様、夕霧が光源氏を詰問する場面があるかもしれない。光源氏はこの詰問には耐えられぬと夕霧が判断して、詰問を止める場合も考えられる。そうだったら、完全な世代交代である。同情される光源氏は、もはや夕霧の相手ではない。

【72】夕霧は、紫上のことを「二条の上」と意識している。紫上は六条院の人ではない、ということか。そういえば、六条院そのものが、今となっては雲散霧消している感が深い。

【73】死んだも同然となっている致仕の大臣にかわって、後のわざを「右大弁」がやっている。やはり、右大弁は、後の紅梅大納言のことだと推測される。柏木亡き今、藤原氏の氏長者は彼が継承するということであろう。このことは紅梅巻で明らかになる。

【74】致仕の大臣の悲しみと女二宮の悲しみとが交互に語られているのは、肉親の愛と夫婦の愛との重みの比較であろう。そして作者は、この巻においては、肉親の愛の方が勝っていると書いているように思われる。落葉宮邸を訪れた夕霧も、この点に触れている。「親子の道の闇をばさるものにて、かかる御仲らひの、深く思ひとどめけむほどを、おしはかりきこえさするに、いと尽きせずなむ」。夕霧は、夫婦愛の方に加担しているのは、夫婦愛の現場に立っているからである。夫婦愛から肉親

の愛、つまり恋愛愛へ。これが源氏物語の愛の流れである。この流れを加速するのがこの巻でもある。

【75】「さぶらふ人々も、鈍色にやつれつつ、さびしうつれづれる屋つかた、前駆はなやかに追ふ音して、ここにとまりぬる人あり」。夕霧の登場は物語的である。ここから夕霧と落葉宮の物語が始まる。夕霧巻の実質的開始。

【76】訪れた夕霧に、柏木との結婚の事情を話す御息所。女二宮も、女三宮の結婚同様、周辺に攻め立てられた結婚であった。柏木の父・致仕の大臣の熱意、朱雀院の意思。こいうわれてみると、致仕の大臣は、光源氏の後追いばかりである。玉鬘の時もそうだった。今回も、女三宮の事例を藤原家で実現させようとして、かかる失態を招いた。世の常ならざる人の真似をして失敗する。これは、世の常の人の宿命だろうか。かつて「落葉をひろった」と言った柏木は、このことを充分に認識していたのかもしれない。さて、この結婚は、自分は反対だったのだという御息所も、光源氏同様、愚痴の人である。「取り返すものにもがなや」。年月は逆さまには行かぬのである。このあたりの重要なテーマ。さかさまにゆかぬ年月よ。

【77】「皇女たちは、おぼろけのことならで、あしくもよくも、かやうに世づきたまふことは、え心にくからぬことなり」という御息所の発想は、宇治八宮に受け継がれてゆく。皇女は独身が原則。みだりに臣下と結婚するものではない。これは、古代なる発想ではあるが、この発想、上流階級においては、相当に根強いものであったと知れる。皇女は世の常ならざる人であっ

て、世の常の人とは違うのだという発想である。天孫降臨、ならびに海龍王国の血脈の人は、断じて世の常の人とは異質なのである。王法の物語。これが源氏物語なのだ。しかし、今、貴種は雑種かしつつあり、御息所の思念は蟬螂の斧となりつつあった、という時代認識が、言った本人にもある。「古めき心には思ひはべしを」。

【78】御息所の言葉に「いとうれしう、浅からぬ御とぶらひのたびたになりはべるめるを」とある。夕霧はすでに幾度か落葉宮邸に足を運んでいるか、消息をやっているものと知れる。従って、御息所のこの余計とも思われる長口舌も、当然なのである。彼女にはこれから夕霧の世話になりたいという気持ちがある。彼女にはこれから夕霧の世話に思われる。貴種への回帰を願ったか、ある心の底にあるように思われる。

【79】夕霧に世話をお願いしてくれた柏木への感謝。御息所は柏木を見直している。これも、この巻のテーマ。柏木へのはなむけ。

【80】夕霧の柏木評。「いとこよなくおよすけたまへりし人」「あまり世のことわりを思ひ知り、もの深うなりぬる人の、澄み過ぎて、かかる例、心うつくしからず、かえりては、あざやかなるかたのおぼえ薄らぐものなり」。これは、すでに柏木の忘れ形見・薫のひととなりを語っていないか。この巻は、柏木を復権させ、柏木の心を、いつしか薫の中に注入するように配慮されていることが理解されよう。花散里が登場した時の手法である。

【81】夕霧の柏木評をみていくと、なんだか柏木が藤原時平の

ような印象をもつのは私だけだろうか。柏木に時平のイメージをかぶせると、藤原氏の衰亡という映像が浮かび上がってくる。

【82】 柏木は、夕霧より、五六歳年長。なのに、出世ということではかなり遅れをとっている。藤原氏の長男として、柏木は皇女との結婚によって、一発逆転の夢を追ったと考えるのは如何。

【83】 落葉宮の母・一条御息所の昔のこと。「いと深きよしにはあらねど、今めかしう、かどありと言はれたまひし更衣なりけり」。才知の人である。

【84】 夕霧がその足で訪問して見た致仕の大臣の現状。「いたう瘦せおとろへて、御髭などもとりつくるひたま」ぬ体。その悲しみの深さ、歴然たるものである。考えてみれば、柏木は藤原氏の氏の長者となるべき男であったのであるから、致仕の大臣の嘆きは当然である。柏木に代わるべき男は今のところ見当たらない。弁の君ではいかにも心許ない。で、致仕の大臣の、「例は心強うあざやかに、誇りかなる御けしき名残なく、人わろし」という惨状が必要以上に強調されているのである。

【85】 致仕の大臣は夕霧に、夕霧の母・葵上の死の時を思い出して語っている。「女は限りありて、見る人少なう、とあることもかかることもあらはならねば、悲しびも隠ろへてなむありける」。これは、葵上をこえて、いま生まれた薫のことを言っていないか。薫は、隠れることなくあらはな人生を運命的に生きていかなければならないのだ、と。

【86】 致仕の大臣の歌。「木の下の雪に濡れてさかさまに霞の衣

着たる春かな」。致仕の大臣家では「さかさまに年月が行っている」。光源氏の嘆きが現実化しているところが、なんとも皮肉である。藤原氏の壊滅。

【87】 四月、初夏。夕霧の一条邸訪問。始めて取り次ぎの女房・少将の君を通じて胸の内をほのめかす。「ことならば馴らしの枝にならさなむ葉守の神のゆるしありきと」。彼は、柏木の遺言をこう理解していたのである。以後の展開は、宇治八宮の遺言によって動くことになる薫の予行というところであろうか。

【88】 御息所は病氣。彼女の余命もいくばくもないように思われる。

【89】 夕霧は、落葉宮のことをかなり知っている様子。「容貌ぞいとまほにはえものしたまふまじけれど」。柏木から、おりにふれ情報は得ていたのではあるまいか。

【90】 「などで、見る目により人をも思ひ飽き、また、さるまじき心をもまどはすべきぞ、あさましや、ただ心ばせのみこそ、言ひもてゆかむには、やむごとなかるべけれ」。夕霧の処世訓である。形より内容。いかにも手堅い。花散里を初めて見た頃のことを考えると、ずいぶんの変わりようである。決して美貌の人ではない花散里に育てられただけのことはある。また、これは夕霧の現在、雲居雁との生活から自ずから引き出された発想だとすると、彼の周辺の状況を暗示している言説だとも考えられる。彼、今、雲居雁に不満をもっているのではないか。それはともかく、この言葉、おのずから女三宮批判、あるいは光源氏、柏木批判となっている。いま、夕霧の時代なのである。

【91】夕霧は、女房たちの支持はとりつけた模様。

【92】「右將軍が墓に草はじめて青し」。夕霧が、「いと近き世」の藤原時平の長男の死に言及したのは、藤原氏の衰亡を暗示している、この巻のタッチと矛盾しない。柏木本人が時平に似ていると先に述べたが、ここは少しずらして時平イメージを醸成している箇所かもしれない。時平一族は菅原道真の靈力によって滅んだが、源氏物語の藤原氏は光源氏の政治力によって滅亡へとプロブラミングされると考えるとよいかもしれない。

【93】人みな柏木の死を惜しむ。「あはれ衛門の督」、これが、この巻の総括である。最後に、秋、這いはじめた運命の子・薫の姿でこの巻を閉じる。柏木の魂がが、源氏物語のなかに這って出てくる趣があって、これは秀逸である。父の運命を背負った薫がそろりと出てきた風景である。